
言葉足らずの凡人

甘楽由希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉足らずの凡人

【Nコード】

N8604N

【作者名】

甘楽由希

【あらすじ】

高校に入学してから5日目、クラスに馴染めない「私」は、喋る相手もいず、暇過ぎて仕方がなかった。昼休みになり偶然左隣にいた無口なメガネ男子を食事に誘おうとするが…！？

1・出会い

言葉足らずの凡人

甘楽

由希

人間は喋らないとストレスが溜まるらしい。
今私はそれを、身にしてみている。

高校生になっただけで、右も左も分からず、ただ戸惑うしかない私。

ちなみに今日は一学期が始まってから5日目。そろそろ友達を作っておきたい時期だが、自分の気弱な性格や、知っている人がいないという状況では……困ったことに友達作りはなかなか難しいのである。

チャイムが4時間目の終わりを告げ、昼食の時間になると、皆ばらばらとグループに別れて散っていく。

(する事ないんだけど……；)

「ご飯を食べる事しかする事がない、つまり完全に暇人である。
本とかも持ってきてないしなあ……と溜息をつき、ふと左隣を見ると、

「ご飯も食べずに読書をしているメガネ男子がいる。

「……………」

入学式の時から隣同士であるが、まだ一度も話した事がない。
……というか、彼が人と会話しているのを見た覚えがない。

そしてさらに、読んでいる本のタイトルが、『相対性理論』

このクラスは文系の人達がいるんじゃないかな!?と突っ込みたくなっただけ、それは置いといて……

初めて見たクールすぎる（無口ともいう）男子に、なんだか妙に話し掛けたくなくなってしまった私は、勇気を出して一言。

「あの… スイマセン」

「……………」

いきなり無視攻撃。

しかし、こんな事ではめげない私である。

「…お昼ご飯、た、食べないんですか？良かったら…一緒に食べて下さい!!」（かなり必死）

「……………いい」

やった！肯定の返事をしてくれた！デートに誘ったわけでもないのに、それだけで嬉しくなってしまうのは私だけだろうか…；

とにかく不審がられないように、何か話そう！（相手の目つきが怖い気がするのは置いといて）

「名前…なんだっけ？」

言った後に、私は気付いた。出席簿を見れば分かるだろうと…。

「かみいで 神出 まがき 真垣」

……………と低い声がした。

「そつかあ、私は一（多分知ってると思うけど）小坂^{こさか} 里枝^{りえ}です。
よろしくね！」

続いてぼそつと…本当に小さいVOLUMEで、よろしくという
声が。

真垣つて苗字にもなりそうな名前だなあ…と思いつつ、気づいた
事があった。

「神出君……もしかしてお弁当、持っていないんですか？」

彼はいつまで経っても弁当を鞆から出そうとしなかったのだ。

「食堂」

と再び低い声が。

（多分）神出君は食堂に行くつもりだったのだろう。今日まで食事
をしている。

「……じゃあ、い、行きましょうか！」

神出君は私の声と共に立ち上がった。

「ほ、本がお好きなんですか？」

私のお弁当の向かいにある、醤油ラーメン（チャーシュー抜き）
の匂いが漂う中、私は質問を試みる。

授業の時以外常に本を読んだり、今でもここに本を持ってきてる
くらいだから、きっと好きに違いない…と思ったが、

「……」

ヤバイ、神出君が…本日2度目の無反応だ。
もしかしてマズイことを聞いてしまったのかな？

「え、えと……」

「……」

あまりの沈黙に耐えられず、私は俯いてしまう。

と突如、神出君のポケットから四つ折になった紙が差し出される。

広げて見ると、最初に目に映ったのは
入部届という文字。

しかも、部活名の所には、物凄く丁寧な字で『文芸』と書かれて
いる。

もしかして、入部しろという脅し……！？

「好き」

「良かったら」

そう言って立ち上がる神出君。

私の傍まで歩み寄って顔を近づけたと思うと…

頬にキスをした。

「！！！！」

突然の出来事に驚き、恥ずかしくなって、また顔を腕の中に隠してしまった。

……どうして！？どうしてなの！？

訳が分からず、神出君の顔を見る事が出来ない。

もうきつと私は、彼から離れられないだろう。

何故か、そう思った。

文芸部見学後～レッツお喋り～

ずっと観察していれば分かるけど、神出君は天才すぎる。

英検・漢検ともに1級をお持ちだし、13か国語くらい喋れるらしいし、当然テストなんかも余裕で学年1位だし…

（ムカつく……この天才児め）

「……」

けれど、この天才児は変わってる。本当に誰とも喋らない。

「あの……」

「何」

基本は単語しか喋らないから、コミュニケーションも取りづらい。

「何してるんですか？」

「執筆中」

文芸部に見学に行つてからは、彼は本を読まなくなった。かわりに、授業中や休み時間中ずっと紙に何かを書いている。

「つて……もう小説考えてるんですか!？」

まだ部活にも入ってないくせに!

と勝手にム力ついている私に構わず彼は紙を差し出す。そこには『題名：宗教的終末論』という文字が。

「……はい？」

終末論つて……色々突っ込みたくなるけど、1つ聞きたい事がある。

「申し訳ありませんが…多分誰も読んでもくれないと思いますよ？」
内容からして面白くなさそうだし、終末論というものに興味を惹かれる人なんているだろうか、いやいなだろう。(少なくとも私は)

「何故」

いや何故つて言われても……面白くないから、とはなんとなく言いにくいなあ……

「……」

「無関係」

「読んでくれる人がいなくてもいいって事ですか？」

「……」

彼は黙つたまま私を指差す。

「私に読んでほしいんですか？いいですけど…出来たら一番に見せて下さいね？」

「了解」

読んで欲しいなら最初から言ってくればいいのに…全く素直じゃないなあ。と思いながら、

「敬語」

…なんだ、突然。

単語じゃなくて文章で言っで欲しい！と切実に願うが、多分無駄だろう。

「敬語」

「…敬語がどうかしたんですか？」

「拒否」

…要するに敬語が嫌って事でいいのかな？

「分かった…じゃあ神出君もちっちゃい声で話すのやめてね？」
声が低い上に小さいから聞き取りづらくってしょうがないのだ。

「……拒否」

「…そういう時は、やだって言ってね？」

「了解」

…さっきの了解って言った時より、声が小さいので声ホントに分かったかは微妙だけど、せっかくなのでもうひとつ要望を。

「…眼鏡取って」

「無理」

こうして、神出君改造計画は（なぜか）着々と進んでゆくのであった…

1・出会い（後書き）

後書き

初めまして！前回『言葉の力』で作品を出させて頂いた、甘楽由希です。

今回はとにかく思い付いたままに書いてみたら、とんでもない内容の物になってしまいました、内容意味不明で申し訳ないです。
ここまで私の小説を読んで下さった方々に御礼申し上げます。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8604n/>

言葉足らずの凡人

2010年10月28日03時41分発行